

研究だより

R4.12.8 (木)

担当：小泉奈津子

佐藤 亜紀

～小学部授業研究会のまとめ～

1 研究授業について

○単元名：つるようカップ2をしよう

○期 間：8月29日～9月15日

○時 間：10：25～11：10

○場 所：プレイルーム

○児 童：5年1組、6年1組（対象児童 6年A、B）

～活動を通して、こんな力を身に付けていく授業。将来のこんな姿につなげていきたい～

- ・体育と関連させ、体の使い方や動かし方を知り、ボールや道具を使ってゲームする活動を用意した。また、生活科と関連させ、友達との関わりや協力することの楽しさを感じたり、自分なりの方法で思いを伝えたりすることをねらった。
- ・ゲームに勝つためにどうするのかを友達と工夫したりゲームに勝った喜びを友達同士で分かち合ったりするなど、児童の豊かな表現や児童同士の関わりが出るように意図的に場面を設定した。
- ・学校生活や日常の場面でも友達と協力することや友達と関わることの楽しさを感じ、言葉や表情、視線など自分なりの表現で「楽しい」、「こうしたい」など自分の思いや考えを伝えようとする姿につなげたい。
- ・本単元を通して、様々な体の動きを身に付け、学校生活や日常生活において自分から活動に取り組むことが増えてほしい。

2 対象児童生徒の本時の（研究授業で）の目標

Aさん	①ゲームに勝つための道具や体の動かし方を考えたりして取り組む。 ②友達を応援したり勝ったら喜んだりして楽しい気持ちや勝ちたい気持ちを表しながら活動する。
Bさん ※授業研当日は欠席。	①自分でボールに手を伸ばしボールを取ろうとし、取ったボールを籠に入れる。 ②自分でスロープにボールをのせ、的まで転がる様子を目で追う。

3 「深い学び」につながる「(主体的・対話的な学びが) できる状況づくり」を学び合えたか(どのように工夫や改善ができたか)

<「(主体的・対話的な学びが) できる状況づくり」の工夫が生きたこと>

(※自評及びグループ協議より)

○チームでボールを集め、集めたボールで的を倒す設定や、物を集めるために道具を選んで使うという設定が面白く、子どもの主体的な取組みにつながった。

○やったねカード、ポスター、MVP 賞、ミスターM の登場などの手立てにより、子どもの勝ちたい気持ちやゲームに意欲的に取り組む姿勢を引き出すことができた。また、積み重ねる中で、勝っても負けても相手を称える様子が見られるようになった。

○上記の手立てにより、対象児童（A さん）は、自分で道具を試しながら選んだり、素早く動いたりできた。勝ちたいから拾う、投げるという様子があった。

＜課題となったこと・改善できたこと＞

●児童同士で協力する関わりができる活動として、チームでラスボス的な大きな的を倒すなど、もうひと工夫あってもよい。

●勝敗をよりはっきり伝えて勝ち負けの経験を積むことも、次への意欲につながるのではないか。集めたボールの重さをシーソーで比べる、ボールの数で点数をつけるなど。

●対象児童（A さん）の本時の目標「楽しい気持ちを表しながら…」とあるが、どうだったか。意見や気持ちを表して活発に活動する友達と一緒に活動することで「楽しさ」をより体験できるということも手立ての一つになるかもしれない。

⇒上記3つの課題について、単元期間が残り2時間という中で改善するに至らなかった。今後の授業づくりの中で支援の手立てとして参考にしていく。

●単元目標にある「人（友達）を意識して」という部分を見ると、作戦タイムは3分では足りない。道具選びや順番決めだけでなく発展できるとよい。

⇒作戦タイム以外に、チームでじっくりと勝つための試行錯誤をする時間を設けた。チームのメンバーでボールの集め方を紹介し見合ったところ、A さんを含め数名の児童は友達のやり方を真似して、道具と手を使ってより多くのボールをすくい集める、という方法を試し、実際のゲームにも生かして取り組む様子があった。

4 この単元で、授業や児童生徒の様子が、どのように変わったか。（PDCA サイクルがうまく機能したか？）。

児童	Before	After
A さん	<ul style="list-style-type: none"> ●道具を使いたい気持ちはあるが、どの道具がよいかを考えるのが難しい。 ●ゲームに勝つための動きの工夫が難しい。 ●ゲームは楽しいが、チームや友達への意識は薄い。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ボールをたくさん集めるための道具を選べるように、チームで相談する時間を設定したことで、いつも同じ道具ではなく、使いやすい道具を探りながら、色々と試してみるようになった。 ○授業の最後に、「速く（すばやく拾う）」、「両手で」、「いっぱい」など動きのヒントを提示しながら実際にやってみることで、両手を使ってどんどんボールを拾う姿が見られた。 ○同じチームの友達を意識するように、応援グッズ（うちわ）を準備したり、応援の仕方を示して教師と一緒に応援したりしたことで、徐々に自分から応援するようになった。

5 ご助言（山形県立ゆきわり養護学校 幼小学部主任 田所弘美 先生）

＜研究授業について＞

- ・対象児について、「主体的・対話的で深い学び」はどうあるとよいか。順番決めでは、事前に小さいボードで相談すると、全体の活動でも順番を選び、ST と一緒に写真を貼った。
- ・作戦タイムでは、「ここで投げると良さそうだね。」などの、子ども同士の話し合いは難しく深まらなかったが、教師が入った中で、友達と話を交わす良さに気付く学びがあった。
- ・ボールゲットでは、道具の中からちりとりを選んだ。前時に使ったからではとST は振り返っていたので、「昨日いっぱい集められたから、これ選んだのね。」と代弁してあげると

- 「ああ、ぼくは…。」と自分の中で確認ができる。
- 最初に片手でボールをわしづかみしてちりとりをいっぱいにした。次は片手で2～3個つかんで入れた。最後にちりとりを床に置き、両手で集めて入れたなど、学びの積み上げがあった。「あれで集めなきゃ。」ではなく、あれで集めることでよりよく取り組もうと工夫していた。時間の中に工夫と成長があり、席に戻ると目元が緩み満足そうに座っていた。
 - 1回目のゲームはよく見ていなかったが、自分が集めた後は見ていた。「自分が入れたんだ。それでいっぱいになったんだ。」と思っていたのではないか。そこでSTが言葉で伝えると「そうだな。」となる。認める言葉かけがあるとよい。
 - ボール投げの作戦タイムのとき、小さなボードで順番を確認して顔写真を貼った。「自分は2番。」と立って座った。「作戦は決まりましたか。」の問いに、上から投げるしぐさをして伝え確認していた。にやっと笑っていたので、「これでやるぞ。」という気持ちだったのかも。
 - 子どもが主体的に取り組む、それを次の活動につながる学びにするために、もうワンプッシュする。動きで確認はできるが、教師が代弁して、「この前、当たったよね。」「上から投げると真っすぐ飛ぶよね。」「力が入っていいよね。」など上から投げることのよさを伝え確認していけるとよい。
 - 「ねらって倒そう！」の結果発表では、2位のチームの発表の時にニコニコと拍手していた。「1位の発表。」と言うと手を挙げた。自分のチームが勝ったと分かった(思った)のでは。そこでも、側にいるSTの一言が欲しい。キラキラカードを渡す場面でも、「ぼく、ぼく…。」と期待した様子だったが、友達がもらおうと拍手していた。
 - うちの使い方について。叩いていれば応援と言えるのか疑問に思ったが、叩いているうちに応援している気持ちになってきたのかなと思う。
 - 感じたこととして。学びを深めるとき、行動だけでなく、行動の裏にある言葉になっていない内面の言葉をどれだけ教師が推測し、共有してあげられるかによって、「この行動はよかったんだな。」「ぼくは、こういう思いで選んだんだな。」「また次もやってみよう。」と確認して深い学びになっていく。
 - 作戦タイムでは、チームでの子どもの関わりを深められる場としては、もう少しうまく使えるとよい。

<学習指導要領を基にしたこと>

- “合わせた指導”は、あくまでの指導の形態。各教科が合わさった指導。この生活単元学習の中に、教科の学びがたくさん入っている。
- 教科のどういった力をつけさせたいか、という視点をもつことで、ねらいや評価が明確になる。小学部→中学部→高等部と積み上げるとき、「教科でこういう学びを身につけました。」「こういう学習をして、こういう力が身につけている。」という情報を提供することが大事。
- 鶴養の“個別の指導計画”を見たとき、各教科について全ては起こしていない。それらは、学部毎に各教科を、“合わせた指導”で網羅しているはず。“合わせた指導”は、あくまで指導の形態だということを改めて確認できるとよい。
- 「生活単元学習」「日常生活の指導」「作業学習」について。各教科は学習指導要領に目標や内容があるが、これらにはない。教師がそれぞれ目標を設定するときに、各教科の内容を取り組んでいるかに立ち返ることで、もっと積み上がる授業ができる。
- 鶴養の研究は今年度で3年。「主体的・対話的で深い学び」を主題にしている。長い歴史の中で大切にしてきた、「子どもの思いを大切にしたい支援」、「できる状況づくり」を踏まえた実践が積み上がっているが、それが全てではない。時代に合った指導が必要。今回の学習指

導要領には未知の世界でも出会ったことのない課題と対峙できる力を身につけていくことが書かれており、課題を解決できるよという趣旨で改訂された。

- 知的障がい児童生徒の「主体的・対話的で深い学び」は、他の子どもと同じだが、学ぶことに見通しをもち、粘り強く取り組み、振り返って次へつなげることが大切である。自分の考えを広げたり深めたり、自分の知識を関連付けたり、より深く理解したり、様々な情報の中から選び、必要な情報を整理したり、問題解決のための情報を組み合わせたり。自分の力をどう組み合わせさせて使っていけるか。A=Bではなく、AからBやCが派生するような知識をもう一度組み換えて育むことが必要。今回の授業から、子どもの考えや行動が、どういう内面から表出したかを丁寧にくみ取って共有するとよい。

<事前に依頼した質問について>

【幅広い実態の児童と一緒に取り組めるゲーム】

- 児童が関われるならどのようなゲームでもよい。生み出すのは大変だが、今回のゲームも様々な実態の中でグループを編成して、皆で集めたボールを倒す。面白いゲームだった。
- 玉転がしや既成の黒ひげなど、友達がいないとできない、先に進まないゲームがよい。既製品でも一緒に楽しめる物なら何でもよい。

【重度重複障がい児童の「対話的な学び」について】

- 鶴養は実態が幅広く、知的の重度、知的と肢体不自由を併せもつ、表出が少ないなど重複児童も同じ学級編成。これは鶴養の良さでもあり難しさ。表出のある子の様子を見て他の子が「自分も伝えたい。」と伝えることもありよい見本になっている。ただ、1～10まで同じ内容でよいわけではない。単元の中で課題別や取り出しで、「この子はこの学習をやって全体の学習に参加し（活動し）よう。」としてよい。
- 子どもが主体的にできるように手を添えたり、声をかけたり、注目できるように姿勢を整えたりと丁寧に支援していた。活発にできる子どもが中心になり、動作や表出のゆっくりな子は流れに流されてしまいがちである。気持ちを表すにも体の動きで表すにも時間がかかる場合、どう折り合いをつけるか。「もう少し待っててね。」「ここはスルーするか。」「ここだけはやらせたい。」と担任が判断して調整できる学習集団があるとよい。一緒の場に居る子どもなので同じ場で共有して学ぶ。教師に手を取られてさせられているのではなく一緒にやっていることを感じられると、子どもたちも「自分がやっている。」と感ぜられる。
- 重複の子どもに限らずどの子どもにとっても、自分の行動によって生じるぼんやりとした思いを教師が代弁することで「自分はこう考えていたんだ。」と気付く。（分かる。）そうして自分の思考が動き出すだけでも学んでいる。思考が動き出すことが1歩前進。丁寧な支援で、子どもたちは少しずつ力を付けていく。

6 研究授業を経ての成果と課題（○成果、●課題）

○主体性や友達との関わりを引き出すような活動を仕組んだことで子どもたちの成長が見られてよかった。授業研究会では、学部を越えて様々な意見が出され、ゲームとは別の時間に作戦タイムを設けたことで子ども同士のやりとりが深まったという成果について共有できたのでよかった。

●STの子どもへの関わり方、言葉のかけ方について、ご助言いただいた。子どもの気持ちを代弁したり、行動の意図を言葉で返し価値づけたりすることで、次の活動に生かせるようにするとともに、子どもたちのより深い学びになる授業づくりをしていきたい。

7 小学部で特にがんばることの取組み「よりよい記録のつけ方を探る」について

- 研究から出ている様式を生かして記録をとっているブロックもあれば、保護者との連絡ノートから抜き出してデータ化し記録の一部としているブロックもあり、各ブロックでよりよい方法を探りながら進めている。
- 記録をとる時間を決め、長い文章ではなくキーワードなどでシンプルに記すことを試みたり、大事なところを印やアンダーラインで強調したりするなど、成果や課題が分かりやすいように表記の工夫をしている。それを基にして、改善策を講じたり、単元の評価をしたりしている。
- 学級、ブロックごとに子どもの実態が異なることから、固定したやり方ではなく、やりやすい方法でよいという考え方で今後とも進めていく。

8 その他 授業研究会で話題になったこと どうしても伝えたいこと

- 小学部では、生活単元学習などの合わせた指導の授業づくりの過程で、各単元では、「どの教科等と関連をさせて取り組んでいくか。」までは話し合い共有している。ただ、その教科等の「どのような『見方・考え方』を生かして子どもたちが活動を展開していけるとよいか。」までの意識は薄く、教師間で話し合い確認されることが少ない。小学部全体で、これからの授業づくりの中で単元毎にしっかり意識して取り組んでいく必要がある。
- 小学部→中学部→高等部と学びを積み上げていくために、子ども一人一人について、「教科等のどのような学びを重ねてきたか。どのような力がついているか。」という情報を提供し共有していく必要があるとの助言があった。そうしたことがスムーズに行える仕組み作りは今後の課題の一つである。学校研究3年の取組みと並行して、本校では教育課程や個別の指導計画について見直しと改善を行ってきたところだが、現行の取組みを生かしつつより有効な方法を探って取り入れていく必要がある。

